

「しかあるに、いたづらに西天を本とせず、震旦国にして、あらたに局量の小見を今案して仏法とせる、道理しかあるべからず」今案の新作袈裟を受持すべからず」唐土の新作は正伝にあらず」いま震旦新作の律学のともがらの所製の袈裟のごとくなるなし。くらきともがら、律学の袈裟を信ず、あきらかなるものは抛却するなり」といい、小量の衣は袈裟を中国的に変えた律学者によって生まれたものとみている。

以上のことから五人の羅漢が搭けている掛絡は掛絡でなく、道誠の『釈氏要覽』や睦庵善卿の『祖庭事苑』にいう守持衣ではなかるうか。堅二肘、横四肘の最小の安陀衣で、臍から兩膝の三輪をおおう大きさである。

その一方、絡子(掛絡)も存在しており、円覚寺の無学祖元(一一二六―一八六)や古林清茂(一二六二―一三三九)の大掛絡(図2・3)、それより約一二〇年程後になった以亨得謙(？―一四〇二)の頂相ちんさうで明らかかなように前から搭けるものであった。

道元禪師は中国的に変えられた掛絡を搭けなかつたように思われるが、守持衣は搭けられていたのであろうか。未だはつきりしないのが現状である。ただ、この羅漢図によって『釈氏要覽』や『祖庭事苑』にいう守持衣の形態と搭け方が証明できたのである。

平成二十一年七月に発行した「そうせい」第百四十六号で紹介した「環付きの守持衣」は、兵庫県加東市岡本の楞嚴寺の所蔵と紹介しましたが、総持院の誤りでした。ここに訂正させて頂きます。

十三回にわたって身近な袈裟である絡子(掛絡)をとりあげてきた。たまたま五島美術館で開かれていた「鎌倉 円覚寺の名宝」展で出品されていた大掛絡をみて研究するきっかけとなったが、木像や肖像画、絵巻図などからも絡子を見出すことができた。また、守持衣も続々と見出すことができ、かつて曹洞宗では守持衣を用いていたことが実証できた。

本連載は本年度中に『曹洞宗の絡子への変遷』と題する一著となつて曹洞宗宗務庁出版部より刊行される予定である。ここに多くの方々より情報やご協力をいただいたことに感謝し厚くお礼を申し上げて擲筆する。



図1 守持衣を搭けて浴室を訪れる羅漢図(図録「聖地寧波」より転載)



図3 古林清茂の大掛絡(井筒雅風「法衣史」より転載)



図2 無学祖元の用いた大掛絡(図録「鎌倉 円覚寺の名宝」より転載)